

草薙ゼミナール

2001 年度 卒業論文集 (上巻)

2002 年 3 月

大阪経済大学 経営情報学部

経営情報学科

指導教員：草薙 信照

草薙ゼミナール 2001年度 卒業論文集 (上巻)

【目次】

指導教員	草薙 信照	2001年度卒業論文集の刊行に寄せて
M985059	平藤 嘉展	ブロードバンドビジネスに関する考察
M985083	吉田 春香	ビジュアル系バンドとそのファンについての考察
M985094	井上 沙江子	カラーセラピーの効果に関する考察
M985109	岡野 亜伊	音楽の時代性に関する考察
M985120	北 真恵美	関西人論の研究～個性の認識とメディアの影響～
M985136	柴田 高志	3 DCG作品「Warp」
M985140	末澤 篤	主体性を育む情報教育の研究 (1)課題解決型マルチメディア教材の開発
M985141	杉本 修一	主体性を育む情報教育の研究 (2)情報教育における今後の課題
M985168	檜垣 健太郎	Web環境を利用した学内専用オークションシステムの開発 (2)システムの利便性に関する分析と評価
M985170	樋口 勝彦	電子機器を利用した選挙システムの現状と課題に関する考察
M985172	平 尚子	携帯電話の普及が市民生活に及ぼす影響に関する考察
M985173	廣石 朱音	21世紀型少子・高齢社会 ～長寿社会を求めて～
M985185	堀江 圭介	インターネットによる街づくりの可能性に関する考察
M985186	本位田 真貴	Web環境を利用した学内専用オークションシステムの開発 (1)システムの設計と構築
M985200	柳田 晴美	情報弱者とパソコンの共生
M985239	来島 克也	愛媛県松山市についての考察 ～若者はどう考えているか～
M985242	佐多 慶一	パソコン廃棄物問題に関する考察
M985246	下迫 学	育児休業制度に関する研究
M985278	細川 晶弘	遠隔医療の現状と可能性

## 【下巻目次】

指導教員	草薙 信照	2001年度卒業論文集の刊行に寄せて
M985008	井原 佑介	住居における快適性に関する考察
M985013	大槻 隆次	びわこ空港の再検証
M985018	小田垣 学	コンピュータ犯罪とサイバーポリスに関する研究
M985047	豊田 可織	広告におけるインターネットの役割
M985070	前中 美紀	都市交通における公共交通のあり方について
M985129	小石 理絵	ITがもたらす地球に優しい「クルマ社会」の姿
M985139	下村 美歌子	ネチケット認識の実態に関する研究
M985144	武田 優子	家庭用ゲーム機の販売に関する考察
M985191	榊岡 由紀子	栄養ドリンク市場に関する研究
M985197	室内 昌之	仕事におけるパソコンの生産性に関する研究
M985202	山口 晴代	大震災による神戸市産業への影響に関する研究
M985262	長屋 庄子	無糖茶飲料のブームに関する考察
M985264	西尾 裕美	USJが大阪経済に与える影響に関する考察
M985269	平岡 利之	インターネットの双方向性に着目した広告のあり方に関する研究
M985329	横田 祐一郎	人間の欲求を利用したマーケティングに関する研究
M005954	堀 隆典	インターネット上のトラブルに関する研究

## 「2001年度卒業論文集の刊行に寄せて」

2002年3月

指導教員 草薙 信照

草薙ゼミの第4期生となる諸君は、“経営情報学部・経営情報学科”の第2期生でもある。そして草薙ゼミとしては初めて、総勢37名の2ゼミ構成となった学年でもあった。

「インターネットを利用した応用情報システムの研究」という看板を掲げて募集したところ、女子だけでも18名、合計44名の応募をいただき、半数以上を断るのは心苦しいと考えて36名を選抜したのが間違いの始まりであった（その後、編入生1名を加えて37名になった）。

2ゼミの運営は思いのほか困難で、1回のゼミコンパは2回の宴会を意味するし、ゼミ合宿もなればバス1台分に匹敵する大移動となった。また、個別指導に1人あたり15分としても合計9時間、卒業研究の指導にいたっては1人に1時間はかかるので合計36時間・・・本当にしんどかったと思いながらも、今となってはそれも良い思い出であって、多くの学生に接することができたという喜びを感じている。ひとつの心残りは、学生一人ひとりに割ける時間が少なくなったのは事実で、その分だけ配慮が至らなかったことは否定できない、という点である。この場を借りてお詫びしておきたい。

さて、卒業論文の総評である。今年度のテーマを見渡すと、例年以上に多方面の領域に広がっている。これは人数が多かったことに加えて、メンバーが個性派ぞろいであったことの表われでもあるといえそうである。このような多様性は、各人が各領域において強い問題意識を持って取り組んだ結果であり、いずれも私の知的好奇心をくすぐるに十分なものであった。このような多岐にわたるテーマについて諸君と一緒に考え議論する機会を得られたことは、私にとっても貴重な経験であり、そういう意味でも諸君には感謝している。

毎年、完成した後だからこそ言うことであるが、卒業論文の意義として私がもっとも重要だと考えることは、諸君にとって、1つのテーマについてこれほど真剣に取り組んで研究することは、おそらく初めての貴重な経験になったであろう、という点である。したがって、一生懸命になって取り組んだという気持ちさえ伝わってくれば、たとえその論文が考えていたことの半分しか言い表せていなくても、あるいは参考文献からの引用の寄せ集めであったとしても、何物にも替え難い貴重な成果であると言える、と考えている。個々の論文の評価は、研究者本人である学生諸君、そして読者の方々に委ねたいと思う。

大学生活4年間の集大成として、卒業研究という大仕事にやり遂げたという経験は、必ずや社会人になって仕事をする際の自信につながるであろう。そして10年後あるいは20年後になれば、良き思い出として懐かしく鮮やかによみがえるに違いない。

最後になるが、今後は同じ社会人として対等に、あるいは逆に私を導いてくれるようなつきあいをしていけるならば、これにまさる幸せはないと思う。今後の諸君の健闘を期待する。